

キボタネ若者ツアー2018

「慰安婦」問題の本当のことが知りたい！

ツアー参加者の感想レポート

参加者 16人 平均年齢 22歳

◆ 21歳 女性 学生

「私には知ってしまった責任があるから」。これは「慰安婦」を学ぶ大学の講義に、ゲストスピーカーとしていらしていた梁澄子さんが、こんなにも辛く苦しい活動を長く続けているのはなぜかという学生の質問に答えたときの言葉である。私はこの言葉に吸い寄せられるようにして、今回のキボタネ若者ツアーへの参加を決めた。

私は大学三年生になるまで、「慰安婦」問題がどういうものか全く知らずに一知らされずに、と言った方が正しいのかもしれないが一生きてきた。もし“知ってしまった責任”が私にもあるなら、私にとってのそれは一体何なのか。日本人として生まれ育った私の責任を、このツアーで見つけたい。気づけば申込書の記入を終えた自分がいた。

今回のツアーに参加して、感じたことが二つある。

まず一つ目は、日本と韓国は似ているということである。韓国では少女像が建てられたり、デモが盛んにおこなわれていたり、「慰安婦」問題への関心、そして反日感情が国民全体にあるのかと思っていた。しかしそうではなかった。韓国の教科書でも、「慰安婦」について詳しく語られることはなく、韓国側が「慰安婦」問題の加害者となったベトナム戦争については、その存在すら書かれていない。小学生に「慰安婦」問題を教えたいと考えても、受け入れてくれる学校はほとんどない。学校での性教育はただビデオを流すだけ。世間では男女の非対称性が根強く残っている。どれも日本の現状と当てはめることが出来る。日本も、「慰安婦」問題に関して詳しく教育することはない。日本にも「慰安婦」被害にあった女性は確実に存在しているのに、である。日本の大学生が小学生に学びの場を設けたいといっても、韓国と同様、ほとんど一もしかすると全てかもしれない一に断られるだろう。

二つ目は、誰もが世界平和を望んでいる、ということである。今回出会った韓国の方々にはみな、“平和な世界を築くために”それぞれの活動を行っていた。日本にいてニュースを見ているだけでは、知り得なかったことである。正直なところ、平和のウリチプや水曜デモで、ハルモニやデモに参加する人たちに、嫌悪の目で見られるのではないかと不安に思っていた。しかし、実際にお会いできた吉元玉ハルモニからも、デモの参加者からも、そのような目は向けられることはなく、むしろ友好的な態度で接してくれた。このことは加害国・日本で日本人として生きる私にとって大きな救いだった。温かい言葉や対応に触れるたび、何かが胸を熱くして、頬を涙が伝っていた。

そして韓国で活動されている皆さんは、自分たちが加害者でもあることを強く認識されていた。どの場所で、どんな年齢の人にお話しをうかがっても、必ずベトナム戦争という言葉が登場する。きっと反日感情を露わにするだけのために活動しているのであれば、登場

しない言葉であろう。あの少女像は反日の象徴などではなく、二度と世界に性暴力で悲しむ人を出さないための、平和の象徴ということ、私はこのツアーを通して強く実感できた。

日本も韓国も、「慰安婦」問題においては被害者であり、加害者でもある。国としての尊厳を守るために、加害者であるという事実を隠そうとしているのだろう。それが教科書や、2015年日韓合意など、それぞれの内容に表れている。

私は、愛国心が強いほうだと常々思う。日本の風土や言葉、食べ物や文化、そしてそこに生まれ育った日本人であるということ、その全てに誇りを持っている。だからこそ、日本には韓国に対する心からの謝罪をしてほしい。私の愛する日本のことを、「愛している」といえば馬鹿にされるような、そんな未来が来てほしくないのだ。日本が事実をみつめて、心からの謝罪をし、これからもこの事実と共に生きていくと言え、きっと日本国内の「慰安婦」被害者の心も救われる。ああこの国は私のことを守ってくれると思うはずだ。そして韓国側も、被害者として真の謝罪を受ければ、自分たちの加害者としての側面にきっと向き合える。こうした連鎖が続けば、いづれ世界から性暴力がなくなり、ハルモニが願った“平和な世界”が必ず築ける。吉元玉ハルモニは私たちにこう言った。「優しさは連鎖することが大切だ。つながることで、きっと良い社会形成がなされる」。今こそこの連鎖を、日本が先陣を切っては始めるべきではないのか。

私は将来教員になりたいと考えている。これからの日本を担っていく子供たちが、日本に絶望する未来を私は望まない。そうならないために、私は子供たちに多面的に物事を見る力を養わせたいと思う。今回の「慰安婦」問題も、日本側だけの情報を仕入れていたら、完全に韓国側が悪者のように見えてしまう。しかし私の経験が物語るように、実際そうではなかったわけである。今回の経験を生徒に正しく伝え、そして、「慰安婦」問題に限らず日本国内、世界各地の問題においても、多面的に、大きな視野で、事実をみつめる、その姿勢を育てたい。それを育てること、新たな希望の種を蒔くことが、わたしの“知ってしまった責任”だと、今はそう強く思うし、果たさねばならないことだと感じている。

◆ 23歳 男性 学生

こんなにも、感情がずっと揺り動かされ続けた5日間は今までありませんでした。毎日様々な場所を訪れて、お話を聞いたり、交流をしたり、目で見たりとする中で、この問題に対する様々な取り組みを知り、そして様々な角度からこの問題に関わる沢山の韓国の人々と知り合うことが出来ました。その中で特に印象に残ったことがいくつかあります。

一つ目は、韓国の多くの若者がこの問題に積極的に参与しているということです。例えば、我々が二日目に交流する機会があった「平和ナビ」は、全国にいくつかのグループが組織をなしており、全部で数百名の学生が参加する大きな団体であるということを知り、とても驚きました。活動内容も、ただ単に勉強会などの「堅い」イベントだけでなく、マラソンやフェスティバルの開催などを通じて幅広く人々に関心を持ってもらえるような取り組みを多くしていることに感心しました。実際に交流した学生たちも、話してみると日常的な感覚も我々と相通じており、双方の国での教育や、政治状況など沢山の部分に共通点があることを確認することができました。しかしながら、様々な過程を経てこの「平和ナビ」の活動に関わるようになった彼らに対して、どのようなモチベーションでこの活動を続けているかという質問をした時、「正しいことをやっていると思っている」と答える彼らの落ち着いた表情の中に強い信念を感じると共に、そのような質問をした我々の中に彼

らのような強い信念が果たしてあるのだろうか、改めて反省させられる機会になりました。

また、3日目に訪れた「マリーモンド」及び「少女たちを記憶する森」では、「このことを記憶し、ずっと忘れないようにしよう」という思いを、ビジネスの形を通して形にしていることに深く感銘を受けました。ハルモニたちのストーリーが可愛らしい花のパターンに表象され、そのパターンを用いた商品を常に身に着けることで服飾としてのデザイン性を保ちながら、ハルモニたちのことをいつまでも記憶しておくことが出来る、というものであり、ともすると重苦しく取り上げることの多いこの問題を、柔軟な発想を以てより軽やかに、然し着実に、人々の心に印象付けることに成功しており、改めて本当に素晴らしい取り組みであると思いました。

マリーモンドの方が「少女たちを記憶する森」を案内してくださっている時、思わず感極まってしまう場面がありました。それを見てこちらも大きく心を揺さぶられたのですが、その一方で、年の大きく離れたハルモニたちに対して、なぜそれほどまでの強い共感の気持ちと、彼女たちの少女時代にまで思いを馳せるような想像力を韓国の若者たちが持っているのだろうという素朴な疑問がありました。自分が考えたことの一つとして、韓国では家族や親族との繋がりを大事にする文化が、未だにとっても強いのではないかと、ということがあります。たとえ自分の家族であっても目上の人には敬語を使うことがあるように、韓国の若者にとって祖父母やそれ以上の年齢の人々は、尊敬の念を以て接する対象ではないでしょうか。そのように自分のおばあちゃん、おじいちゃんを大事に思う気持ちが、自然とハルモニたちに対しても同じように向けられているのではないかと考えました。

二つ目に印象に残ったのは、韓国の女性たちの力です。我々が5日間様々な場所を訪問する中で、迎えてくれたのはほぼ全て女性の方たちでした。水曜集会に参加した時も、その場にいた人たちの多くはやはり女性でした。以前韓国のスーパーマーケットにおけるデモを題材にした「外泊」というドキュメンタリー映画を見た時も韓国の女性たちの団結する力に少し驚きましたが、日本と同じように依然男性優位の社会の中で、様々に連帯しながら取り組みを進めていく韓国の女性たちの力強さに、感銘を受けました。

最後に挙げるのは、この問題に関わる韓国の人々が、皆私たちのことを温かく迎えてくれたことです。渡航前には、韓国の訪問先で、時には詰問されるような状況に置かれたりすることもあるのではないかと、少し懸念していたのですが、実際そのようなことは全くなく、沢山のことを教えてくれる彼らからは「知ってほしい」という強い想いを感じました。「これからの若者には二度と同じような思いをしてほしくない」というハルモニたちの想いや、歴史を研究する韓国人の友人にツアー後の感想を話したところ返ってきた、「あなたのように知ろうとしてくれる若者がこれからも増えれば、この問題は解決されていくはずだ」という言葉にも見られるように、両国（特に日本）の若者がもっとこの問題に関心を持ち、共に交流することによって協力して平和を構築していくことが大事であると改めて感じ、そのような意味で今回のツアーは非常に大きな意義をもっているものだったと自覚しました。また、今回で得た様々な知見を自分の中だけに留めるのではなく、周りの身近な範囲から、少しずつ「伝える」ということをしていこうと思うようになりました。それと同時に、もっとこの問題の問題点について明確な意見を持てるように、いろいろなところに向いて引き続き勉強していきたいと思いました。

改めて、このような意義深いツアーを計画してくださった、まるで皆のお母さんのよう

な包容力を持つ梁澄子様を始めとする、希望のたね基金に関わる全てのスタッフの皆さまに、深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

◆ 20歳 学生 女性

私が慰安婦問題について知ったのは、テレビの報道でした。日本と韓国の合意によって慰安婦問題について解決したはずなのに、まだ日本へ謝罪を求めて騒いでいるイメージがあり、慰安婦像は反日の象徴とも捉えていました。そんな時、学校の授業で慰安婦問題について学び、資料などを読んで実際にあった悲惨な事実を知りました。慰安婦制度の事実はないなどといった意見もよく目にしますが、きっと日本にいただけでは知り得ないことがまだまだたくさんあると感じ、今回このツアーに参加することを決めました。しかし今の日本の状況からすると、親にツアーに参加したいと言うことや友人に韓国へ慰安婦問題について学びに行くというのはかなりハードルの高いものでした。今から思うと、この時に勇気を振り絞って良かったと心から思います。

今回のツアーで大きく変わったのは慰安婦問題に対する視点です。韓国に行き学んだことで、日本でされている報道を鵜呑みにしてしまっていたことに気づきました。慰安婦問題は国同士の問題、つまり外交問題のように扱われており、そのことに疑いもしたことがありませんでした。しかし、実際に平和ナビの韓国の学生の方とお話をしたり、たくさんの人に会ったりしていくに連れて、外交問題ではなく個人の人権の問題であることに気づかされました。それは韓国で出会った方々から、日本人である私たちに対する反日感情を感じる事がなく、むしろウェルカムと言うような暖かさだったため、本当に韓国の人たちは反日なのだろうかと思ったところから始まりました。そして日本人には嫌韓感情が根深くあるのは何故なんだろうと思いました。慰安婦問題を取っても、‘韓国’が日本に対して嫌がらせをしていると捉えられる報道をされがちですが、本当はハルモニたちの人権を韓国政府に対しても訴え、韓国以外の地域で今も人権問題に苦しむ人たちへ手を差し伸べていることがわかりました。このことは事実をどの角度で見るとによって変わっていくことを教えてくれました。

何よりも本当にこのツアーに参加して良かったと思います。いろんな考えの人に出会え、さらにいろんな世界を持った仲間を得ることができ一生の宝になりました。日本に帰ってきてからも、韓国で感じたことを表に出すことが厳しいことを肌で感じました。このツアーの記事も、キボタネも事実とは異なった捉え方をされ、激しく叩かれています。まだまだこのような社会では、大きな声で意見を発信していくにはリスクが伴います。こんな社会ではいくら事実や正しいことがあっても大多数という大きな力によって消されてしまいます。そんな社会を変えていけるよう、マイノリティーに属していると感じ、生きづらい社会が窮屈だと感じている人々に寄り添っていきたいです。そしてハルモニたちに会えた私たちにはハルモニの願いを受け継いで行く必要があると思います。同じ悲惨な歴史を繰り返して欲しくないという平和を願うハルモニたちの気持ちを無駄にしてはなりません。どうすればハルモニの願いを叶えられるのか、私たちの課題ではないでしょうか。

◆ 22歳 学生 女性

はじめに

今回キボタネツアーという貴重な経験をさせて下さった、梁澄子さんや多くのスタッフの方々に大変感謝しております。本当にありがとうございました。

本文では、日本にただけでは到底理解できなかつたこと2つについて感想や意見を交えながら述べさせていただきます。1つ目は、日本の多くの市民が抱いている「慰安婦」問題への印象と、韓国の人々が抱いている印象の違いとその原因について。2つ目は被害者であるハルモニの考えについて。

「慰安婦」問題に対する各国の考え方の違い

「慰安婦」問題が日本で取り上げられるとき、その多くが「反日の韓国人が、また騒いでいる。」といったニュアンスのものであるという印象を受ける。WAM（アクティヴミュージアム 女たちの戦争と平和資料館）という「慰安婦」問題に関する博物館に行ったとき、日本の教科書から「慰安婦」に関する記述がある時を境に一切消滅したということを知ったが、それだけではなく今「慰安婦」制度自体を無かつたかのようにしようとしている流れができてきているように思える。「慰安婦」についての公文書を読み、兵士手記を読んで「慰安婦」制度が実際に存在していたことは確信していた。しかし公文書の内容などは日本国内で普通に生活しているだけでは決して知りえないことであるし、実際に「慰安婦」制度があつたと言っても信じてもらえることは無かつた。

今回のツアーで分かつたことは、「慰安婦」問題についての活動は「反日が騒いでいる」のではなく、必要だから世界に訴えかけているということである。「慰安婦」問題に対する韓国の多くの活動が、日本人が嫌いだからや日本を陥れたいがための虚偽などではなく、「慰安婦」制度という性暴力を、後世まで伝え防ぐことを目的としていることを知つた。また、「慰安婦」問題のデモ（水曜デモ）や意見というのは多くが韓国政府に対するものであつて、日本を激しく非難するものではなかつた。また、「慰安婦」問題を切り口に、世界中にある様々な性暴力について考えていこうとしている姿勢が伺えた。あくまで韓国は、人権問題として「慰安婦」問題を扱っているのに対し、日本は外交や政治的問題として捉えており、食い違いが発生しているように思える。

実際に韓国で「慰安婦」問題について活動している人々と話すことで、彼らの目的が反日などでないことは本当によく理解できた。もちろんすべてが違うとは言切れない。今回は問題について活動している人々とのみと話をしたので、一般人の意見もぜひ聞きたいと思つた。過去日本が行つた行為によって今の日本人全体を嫌うことは違う、という意見もあつた。また、韓国は「慰安婦」制度の被害国でもあると同時に、ベトナム戦争の戦争犯罪加害国でもある。その認識が学生や挺対協からも伝わり、それを問題視し活動している人がいることも人権問題への真摯な姿勢が伝わる。

このように、日本側は「慰安婦」問題を反日の象徴と捉えているのに対し、韓国の多くは反日などではなく、過去に起きた戦争犯罪を繰り返さないために活動をしているという違いが存在していることを理解できた。

吉元玉ハルモニの意見について

「慰安婦」問題について日本のニュースで見ると、泣き叫んで怒りをあらわにするおばあさんたちの姿が映ることがある。日本が嫌い、兵士たちを殺してやりたい、そのような恨みや怒りが全身から伝わってくるようなエネルギーに恐怖を感じるほどである。

ハルモニの辛い経験は想像もできないが、同じ体験をすればほとんどの人が恨みや怒りに捕らわれてしまうであろう。しかしハルモニの多くが、恨みや怒りを伝えたくて活動しているのではないということが、実際に会つて分かつた。恨みや怒りではなく、一人でも多

くの女性を性暴力から守りたい、後世に知ってほしいという思いで活動しているのである。彼女たちは恨みの連鎖を作りたいのではない。日本人全体を嫌っているのではない。吉元玉ハルモニはむしろ訪問に来た若者に「かわいい子どもたち」と話しかけてくれたように、日本人だからといって避ける傾向にあるわけでは無かった。平和になってほしい、次の世代に経験させたくないという強い思いがあり、決して報道されているような人物像でもないことが分かった。

このように被害に遭ったハルモニとのお話で、「慰安婦」被害者は日本人嫌いの怖いおばあさん、という偏見が消え、世界の平和を願って活動している活動家という印象が変わった。すべてのハルモニの意見や思いは分からない。だがハルモニがその存在や「慰安婦」問題を通して、皆が性暴力をこの世界から根絶することへの意識を持ってほしいという願いを持っているのではないかと私は予測した。

終わりに

今回のツアーで特に印象に残ったことを2つ述べさせていただきました。1つ目が日韓の「慰安婦」問題に対する意見の違い。2つ目がハルモニと実際に会ったことについてです。

参加したことで、日本で知れる情報と実際に行かないと知ることの無い情報のギャップに驚き、何か自分ができることがないか考えたとき、まず「慰安婦」問題について講義を行っているゼミの教授に感想や知ったことを報告し、授業に反映してもらおうと思いました。講演などなさるときはぜひ参加したいです。

◆ 女性 24歳

今回のキボタネツアーで、とても貴重な経験をたくさんさせていただいて感謝しています。

ツアーでは、以下の3つのことを学びました。

- ①人権問題だということ
- ②立場が違って同じ目的のために協力できるということ
- ③一人の少女の身に起こった出来事だということ

①人権問題だということ

日本で「慰安婦」問題の話が出る時には、デマだとかそうじゃないとか、韓国側の意見がどうこうとか、そのような話を聞くことが多く、実際に戦時中や戦後に何が行われて双方がどのようなことを事実と認識しているのかもよくわかりませんでした。それは誰かの身に起こった問題ではなくて、日本と韓国の国の主張が食い違ったために問題が起こっている（特に日本で行われている報道は韓国がウソやワガママを行っているような印象です）ように見えました。韓国でたくさん話を聞き、その認識は全く違うものだったということがわかりました。特に、梁さんの講義や博物館を見学してわかったのですが、韓国の政府や多くの人々は「慰安婦」問題を人権問題としてとらえ、二度と同じようなことが起こらないように語り継いでいくことや被害を受けた人々を尊重する（そのための賠償金）ことを目的としていました。

ツアーで多くの人たち、活動家の人や学生、マリーモンドの社員たち、デモに参加する人々などを見て、日本にいる人たち（関心がないか理解できないか頭から否定するか、という人が多い）との差を実感しました。日本と韓国は女性の地位や性犯罪に対する認識な

どで厳しい状況にあることは同じかもしれませんが、女性の人権問題である「慰安婦」問題に対する理解が浸透し多くの人が関心を持っている韓国は未来に希望が持てると感じました。

②立場が違って同じ目的のために協力できるということ

韓国の学生と討論会をした時に、私は「加害者側の国である日本と被害者側の国である韓国の人々は、どのように連帯できるのか」と質問しました。

韓国の学生の一人は「韓国にも、右派や左派や立場の違う人たちがいる。でも、「慰安婦問題」に関するデモには、右派の人も左派の人も参加し、共に声を上げる。立場が違って、人権問題の解決という同じ目的のためなら協力して進むことができる」と答えました。

その答えは、私にとっては衝撃でした。

私は左派を自認しています。政治的な主張や、それ以外でも自分と意見の違う人の話をあまり聞く気になれないし、否定してしまいます。でも、それは間違っていたとわかりました。

考え方が違っていても、違うまま、お互いを尊重しながら同じ目的に進んでいくことはできます。立場が違って、一つの問題を一緒に考えていくことはできます。そのために対話と理解が必要だと感じたし、今回のツアーで韓国の人たちの意見や考え方がわかって初めて問題の解決のために共に進む土台ができたと感じました。

今回このツアーで初めて知り合った、たまたま同室だった方との会話が与えた影響もとても大きかったです。彼女は私と政治的な立場が違いました。しかし話していると、日常の中で感じる憤りやこうなってほしいと感じることは共通していることが多々ありました。ツアーに参加する前の私だったら立場の違いを知っただけで偏見を持って話をろくに聞かなかったかもしれません。しかし韓国の学生と話をしてから、意見が合う部分は共感して、意見が合わない部分は「そうなんだ」って相手の話を聞くことは両立することだし、むしろそれが大事なんだと身を持って実感しました。

ツアーには一人で参加したので周りにはみんな初対面でしたが、日々性暴力について考えている人や関心を持っている人たちと会って話せたこともとても貴重な経験でした。

③一人の少女の身に起こった出来事だということ

今回のツアーの中で私の中の「慰安婦」問題に対する認識を大きく変えたのが「少女を記憶する森」でした。

その日の午前中、マリーモンドの社員の方の話を聞きました。ハルモニー一人一人に花を与え、その花でパターンを作ったものを販売するというのは、ホームページを見ただけではわからない強い信念のもとに作られている製品であることがわかりました。

私は花が好きです。誰かが私のことを知ってくれて、考えてくれて、「あなたはこの花を与えたい」と提案してくれたらそれはそれは嬉しいと思います。

商品を作ってその売り上げを寄付しているだけだったら「立派な会社だな」と思うだけだったと思います。でも、一人一人に違う花のイメージを重ねて、それが商品になったものをみんなが手に取る、というのは、とても深い意味を持つ行為だと思いました。

私や誰かが「この花が可愛い」「この色が好き」と思うのと同じように、ハルモニーたち一人一人がみんな違う個性を持っていて、違う人で、違う人生がある。そのことを強く感じられる会社・製品だと思っています。

その日の午後は、少女を記憶する森に行きました。

時期が合わず枯れた植物が多く殺風景な森でしたが、そこでの経験は私にとっても強い印象を与えました。

森にはいくつものオブジェがあり、その一つ一つに意味があります。

森全体のコンセプトは、「ハルモニたちが少女だったころに過ごした場所」。ハルモニたちが子供の頃に使っていたものや、風景や、過ごした場所などが模してあります。

それを見て、マリーモンドの方の解説を聞きながら、彼女が話している中で思わず泣いてしまったのにつられて、私も泣いてしまいました。

個人的な話ですが、私は映像を作っています。自分の感じたことや考えていること、怒りや憤りを作品にしています。芸術作品がもつ力に疑問を感じることもあります。直接何かの役にたつわけではないし、むしろ無駄なことばかりです。でも、今回のツアーで、私が「慰安婦」問題を一番自分自身のこととして感じられたのは少女を記憶する森でした。そこにあった縁側のようなオブジェ、あそこに座っている少女を想像することで、私は大きな感情の揺さぶりを体験しました。もちろんツアーの前半でたくさんの事実を学び、多くの人の話を聞いて知識が備わっているからこそ感じた気持ちですが、芸術のもつ力は、そのようなものだと思います。

暖かい日差しの中、縁側に座るハルモニを想像しました。私が子供のころと何もかわらない、夢があったり、家族が好きだったり、絵を描いたり遊んだりしている一人の女の子。そんな幼い子供が、戦争の下で性暴力を振るわれる。戦争がなければ、そのまま大人になって他の人生を生きることができたのに、戦争があったから、性暴力があったから、違う人生になってしまった。

「慰安婦」にされてしまったハルモニたちは、「元慰安婦」でなくなることはありません。当時受けた性暴力から現在の無理解まで、たくさんのできごとがあって、解決しないから解放されません。

そのことがとても悲しいです。

悲しいから、同じようなことがもう誰にも起こらないでほしい。未来に性暴力を繋げたくないし、過去に性暴力に遭った人は救われてほしい。そう強く感じました。

このツアーに参加する前は「慰安婦」問題に対するマイナスなイメージもあったし、バッシングなどが怖かったから友人たちにはあまりはっきりとツアーの内容を言えませんでした。でも、ツアーを終えた今、すごく前向きに「慰安婦」問題や性暴力や女性の人権について話すことができます。それは今回のツアーのプログラムはもちろん、一緒にツアーに参加した人と話せたから感じることもできた気持ちです。

このツアーに参加して知ったこと・感じたことを周りに、未来に繋げていきたいと思いました。自分なりのやり方で活動していきます。

ありがとうございました。

◆ 22歳 学生 男性

私がキボタネのツアーへの参加を希望した理由は3つ挙げられる。

1つ目は、日本軍「慰安婦」問題がなぜ問題と捉えられているのか疑問に思ったから。2つ目は政治活動の実態を理解するため。3つ目は韓国に行ってみたかったからである。

私は普段経営学と情報学の勉強を大学でしている。よって政治、国際学、フェミニズムなど、研究分野と関わりが薄い科目の情報が入りにくい状況にいた。キボタネのツアーに

参加する前に「慰安婦」問題について私が事実として認識していたことは以下のとおりである。

1. 慰安所は第二次世界大戦中に日本軍が設置した施設である
2. 「慰安婦」の中には自ら志願した者が少なからず存在し、日本人「慰安婦」もいた
3. 日本政府は謝罪と多くの賠償を支払ったのにも関わらず、韓国人の多くが未だに不満を抱いている

参加を希望した1つ目の理由でも述べたが、疑問としていたのは、なぜ日本軍「慰安婦」問題がそもそも問題と捉えられているのかである。世界史を勉強する中で、戦争で性暴力を含むあらゆる暴力や搾取が行われるのは一般的なことだと学んでいた。「慰安婦」制度よりも遥かに規模が大きく、卑劣だと客観的に言える出来事は数多く存在した中で、なぜ「慰安婦」制度だけにそこまで着目するのであろう。そもそも謝罪を得ることを目的としている時点で私は本質を間違えていると思っていた。過去にあった「慰安婦」制度という事例から何を吸収し、より良い人類の実現に貢献するかを考えるべきであるとも思っていた。参加する前には、韓国人の多くはただ闇雲に怒りを日本政府や日本人にぶつけているだけで何も根本的な解決を求めていないように見えた。そしてこれは私がキボタネのツアーに参加した2つ目の理由に繋がる。

デモはなぜ行われるのかが今まで理解できなかった。ある人為的問題があったとき、その根本的な解決とは人間が望ましくない行動をする理由を無くすことにあると考えた。私は脳と環境には密接なつながりがあり、それをまず十分に理解する必要があると思った。そのつながりや関係を理解することで、どのような原因で人は暴力を起こすのかという仕組みを明らかにし、その原因を取り除くことが根本的な解決であると思う。デモを行っても暴力を本質的に解決できないので、行う意味を見出せなかった。

キボタネツアーの中でその意味がわかった気がする。ツアー3日目に慰安婦記憶の場を訪れたとき、世界のへそに刻まれていた言葉がそれを教えてくれた。「記憶されない歴史は繰り返される」記憶したところで根本的な解決にはならないとは思いますが、少なくとも暴力に対する十分な予防策になりえると思った。あらゆる不明の要素が存在するが故に暴力を簡単には根絶できると思わない。ならば今、過去の「慰安婦」制度を含む暴力の歴史を問題とし、なぜその状況に至ったのかを考察して理論を立て、出来るだけ多くの人々に伝えていくことは重要なことだと思う。また、被害者の援助は被害者以外の社会全体にも利益があることだと思う。

キボタネツアーに参加したことによって「慰安婦」問題に関わる運動をしている方々の印象が大きく変わった。参加前は、先ほども述べたが地球温暖化、貧困、戦争など、多くの未解決の問題が人類を妨げる中で、何も社会に貢献せず、ただ感情を世間にぶつけているような印象であった。しかしのみ消されようとしている歴史を伝え、世界中の性暴力被害者に支援を送ることによって確実に助けられている人がいると分かった。日本と韓国両方の政府から圧力を掛けられつつも信念を持ち、より良い未来のために行動していることはとても名誉があり尊敬に値すると私は思う。

私がキボタネツアーに参加した3つ目の理由は韓国に行ってみたかったことである。自分が訪れたことのない地で今まで学んだことのない分野の勉強をすることによって、自分の世界観を広げることが出来ると思った。しかし、「慰安婦」問題という個人的に興味は薄

かった分野の勉強をすることには少し抵抗があった。そこで決め手となったのは2万円という参加費だ。2万円で生存者の方の話を聞くことができたこと、マリーモンド訪問、平和ナビの学生との討論を含む貴重な経験の数々をさせていただいた。そのうえ親切にスタッフの皆様から「慰安婦」問題の知識だけでなく食べ物や文化の情報を提供していただいたことに非常に感謝をしている。また、私が普段勉強していない分野について研究している学生たちと交流できたことも本当に良い経験となった。これからも何か交流できる場があればひと参加したい。

◆ 22歳 女性

『日本軍「慰安婦」にされてしまった方々と実際にお会いしてお話ししたい』

そう学校の先生に直談判したのは、たしか高校生の頃だった。

中学生のとき日本軍「慰安婦」について学び、しばらく経って、私はレイプの被害にあった。まだ16歳。相手は30を裕に超えていた。そのくらいのときに、たまたま読んだのが日本軍「慰安婦」についての本だった。そこには日本軍「慰安婦」としての生活がどのようなものだったのかが詳細に描かれていた。その時に、勿論経験は比較になるようなものではないが、望まない相手から訳も分からないままそういう行為をされること、自分でよく知らない場所・知ることさえまだ良しとされてこなかったような場所が誰かの手であたかもその相手のものかの様に荒らされ続ける状況、耐えるために心を殺すこと、そうするうちに自分自身の心の形が変わっていってしまうこと、身体に異変が起きたときに、何も知らないが故に漠然と襲ってくる不安・恐怖、とてつもない痛み、そういったことが自分の痛みと共に想像できた。当時本に描かれる少女たちと近い年齢であったこともあり、私が言葉や感覚としてまだ表せてすらいなかった心の傷がそこに見えたような気がして、彼女たちにとどこまでも心動かされていったことを覚えている。その上で、そこはいつ誰が命を落としてもおかしくない戦場という場であり、彼女達を蹂躪する男は数知れず、更には彼女たちが妊娠や病気の恐れが起きれば捨てられてしまったこと、もしくは自らそこで命を絶ったことにどれだけの悔しさ・無念を抱いただろうと、どれだけ恐ろしかっただろうと、本を読みながら強く感じたことを、私は未だに忘れられない。

そういうことがあってから、私にとって日本軍「慰安婦」問題というのほどこまでも戦時下における性暴力の話であり、だからこそ補償等は無論必要と思うものの、それも戦時下の性暴力だったからこそ出てくる議論であって、結果として、私の中には性暴力としての切り口以外存在していなかった。

しかし、吉田証言についての記事が2014年頃載った途端、日本軍「慰安婦」制度に対する空気・世論は大きく変わったのを私は肌で強く感じた。日本軍「慰安婦」は捏造だという言説が公の場でされる事自体に私ははじめ本当にショックを受けたが、一方で、「嘘だ」なんて言うのは一部の人たち、こんな言説いずれ否定されすぐ消えるだろうと一蹴していた面もある。しかしそれ以降、あまりに強く色んなレベル・角度から日本軍「慰安婦」制度はなかったといわれ、あったといえれば攻撃されたりその人自身の言っていることすべてが嘘と言われたりするようになって、それが普通にまかり通りはじめてしまった。そしてついには私自身が、「慰安婦」問題自体について語ることに恐怖を覚えはじめた。「慰安婦」と口にすれば政治に強い関心のある者と見られ、それを捏造というかそういう事実があったというかで右か反日と見られる。そしていつしか前者の方が愛国者として強いパワーを持つようになってしまった。そういう中で、私はたしかに、日本軍「慰安婦」問題に

強い想いを抱えながらも、口をつぐんでいったのである。

そんな時に知ったのが、今回のツアーだった。これは兎にも角にも行くしかない、これだけ長く心にあり続け、そんな私でも口をつぐみはじめてしまった今、実際に被害者の方に会う意味の大きさは計り知れないと心底思った。参加は即決だった。

前置きが長くなってしまったが、現地でははじめのミュージアム、艇対協の方のお話、マリーモンド、ここまで日本軍「慰安婦」制度が現在進行形で問題視され、物事が動き、更にはいまの若者たちへと引き継がれているのだと、本当に実感するばかりだった。そのような集会では若者の姿を殆ど見ない日本とは全く違った。そういう中で非常に心に突き刺さったのは、彼らが語るのは決して第二次世界大戦下の日本軍による「慰安婦」制度の問題だけではないということだった。彼らは必ず、韓国軍がベトナム戦争で犯した犯罪について、そして今現在の世界で起こっている戦時下での性暴力について、言及する。日本ではいつも、日本軍「慰安婦」の話をするれば、それを捏造という人たちはベトナムでの韓国軍の蛮行に触れ、日本軍の罪を打ち消そうとする。でもやはり、そういう問題ではないのだ。どちらも問題、犯罪であり、どちらにも向き合い、もう二度と起きないようにしていくしかないのだ。これらの事実は、日本でどれだけ報じられているだろう。どれだけのひとが、艇対協のミュージアムの最後には今現在の性暴力やベトナム戦争のことも述べられていることを知っているだろうか。そしてそれを知ったとき、「捏造だ」と、「韓国人は日本ばかり責める」と騒ぐ人々は、一体なんというであろう。日本でも、艇対協の名を知る人は多い。しかしながら、彼らについての事実はあまりに知られていない。無知は、恐ろしい。その一方、私の中で、日本軍による「慰安婦」制度の問題が、やはり戦時性暴力についての問題なのだ、今まで思ってきたことは間違っていなかった、と確信した瞬間だった。

しかしながら一方で、私は自分の頭には届いても、想像以上に心を動かさない自分に気がついた。心が蓋をされたようになって、心で受け止めることが、何故かできない。

それが一気に壊れたのが、少女像の前だった。

少女像は、多くの車の行き交う場所に、高い高いビルに囲まれながら、まっすぐ前を向いて座っていた。

彼女はそこから動くことはできない。どんなに痛めつけられようが辛かろうが怖かろうが、そこに佇み、真実を示し続ける。

私なら、怖い。あまりに頑丈で強く高くそびえ立つビル、力、数えきれない人々を前に、「嘘だ」とののしる人を前にしてさえも、自分が傷ついたことを晒し、それでも私はそうなるために生まれた訳ではないと、自らの尊厳を訴える。私は足も心もすくんだが、それでも鉄でできた彼女はすくむことさえなく、まっすぐ前を見つめたままそこを動かない。私は少女の後ろに、これまでに亡くなったハルモニたちが彼女を支えているのを感じたし、順にこの隣の席に座っているんだらうなと思わずにはいられなかった。そして更には、この像を守るために若者が、24時間態勢でそのすぐ隣で待機している。

私は急に涙が止まらなくなった。やっと心が動いた。

ただでさえ辛い体験をしてきた彼女達を、ここにいまだ自らの尊厳のために立たせてしまっていることが、私は本当に申し訳なかった。できることならあんな辛い思い出を忘れて、天国でのほほんと美味しいものでも食べながら幸せに暮らしてほしい。でも世界の現状は、彼女達がそれを忘れてもいいと思えるにはあまりにお粗末だ。自分たちは男の性欲の発散場所になるために生まれた訳ではないということが認められ、もう性暴力は起

こらないだろうと安心できるその日まで、彼女達はこれからも、亡くなった後でさえ順繰りにここで像を守り続けるだろう。一方で、この像は、そしてこの像を天国から支えるハルモニたちは、日本軍の犠牲になった少女たちのためだけでなく、すべての戦時制性暴力の被害者、延いては全ての性暴力被害者のために、私たちは男の性の道具にされるために生まれてきたのではないと訴えて、そこに居て、闘い続けてくれているのだと私はその場で心から感じていた。それらの事実に、私は涙が本当に止まらなかった。

そのとき、私は何故自分がここにきてはじめて心が動いたのかが分かった。それはきっと、それまでの性暴力被害者としての自分の孤独がそこではっきり浮き彫りになったからだと思う。私は韓国についてから、もしかするとこの被害者としての自分・闘いはひとりぼっちではないのかもしれないと薄々感じていた。でも、自分のこれまでの孤独を考えると、この闘いはひとりぼっちじゃないと感じることで噴き出すであろうこれまで沈めてきた感情は測り知れなかった。それが怖かったのだと思う。だから一生懸命蓋をしていた。しかし、これまでも数えきれないハルモニが、そして今やその声を受け継いだ若い人たちまでもが彼女達と連帯し、全ての性暴力と闘ってきてくれていたんだと目に見えて思うと、抑えきれなくなってしまったんだと思う。

日本では、いまだに加害者の力が強いことが少なくない。被害者が声をあげようものなら、相当な力ある被害者でない限りいとも容易く握りつぶされるか一生被害者として紹介されるばかりだ。私自身、レイプのあとも教師から長年にわたり性暴力を受けたり、しまいには父親からも性暴力を受けたり、本当に色んなことがあった。自分を守る力、守りたいという思いさえ奪われ、失い、すべてを受け入れることだけが生き延びる道になっていた私にとって、闘うなんて選択肢はあまりに遠く、そんな風に思えるには、私はあまりにひとりぼっちだった。とにかく生きるだけで、精一杯だったのだ。でも、本当はそうではなかったのかもしれない、これだけのおばあさんたちが尊厳のために戦い続け、その声を受け継いだ者も立ち上がり、それを支える世界が、ほんのお隣にあったのだ。勝手な話かもしれないが、私はその像を前に、そこに座り続けさせてしまうのが申し訳ないのと同時に、最後には心の芯から励まされたような気がせずにはいられなかった。

私たちがいる間、スーツ姿の日本人男性が3、4人で訪れた。「韓国来たらここ来てみちゃいますよね～」と酔ったように笑いながら数枚像の写真を撮りすぐ去っていった。彼らはその写真をどうするのだろうか。どんなキャプションをつけるのだろうか。私はひとり勝手に色んなものが踏みにじられた気持ちだった。悔しくて悲しくて、仕方がなかった。酔った日本人男性に、薄ら笑いを浮かべられながら見せ物のように写真を撮られる気持ちが、彼らには1ミリでも想像できるだろうか。日本は、日本人は、日本軍「慰安婦」制度とその中を生きさせられた女たちの過去を全然分かりきれていない。分かり始められてさえいない。

それでも像を撤去しようとする国家の愚かさよ。

そしてその翌日ついに、吉さんにお会いすることが出来た。

そのときのことを言語化するのは、今でも本当に難しい。

でもいくつか言えることがある。

ひとつは、性暴力の持つ力の大きさだ。日頃思うことだが、性暴力は、その瞬間も去ることながら、そのあとも非常に大変である。というよりもあとが大変すぎる。生き延びるために変形した心は、自分も他人も傷つけやすい。それでも生きて、一生懸命変形してしまう前の心を取り戻すか、覚えていなければおかしな形に積み上がってしまったものを試

行錯誤で壊し直し建て変えていく他ない。その過程では、一層傷つくことは分かりながらもなぜかあえて自分を傷つけることを必要としてしまったり、大切にしてくれる人こそ傷つけたくなったりしてしまうこともある。実際梁さんはじめ支援者から見るおひとりおひとりのお話を伺う中で、それは本当に実感した。他者からの全く望まない行為を生き延びたがために、自分を、他人を傷つけてしまうことの苦しみはいかほどのものであっただろう。それで周りから人が去ることだってあったかもしれない。そのときの哀しみ孤独絶望は如何ほどだったであろうか。被害者は直接慰安婦であったとは言わないまでも、周りは薄々気付いているケースが多いという話もあった。それだけ分かってほしい、でも言いたくもない、言えない、そういうなかで周りから見れば理解の難しい自分の行動の理由を時に他者に説明せねばならない時などは本当に苦しく難しかったと想像する。それだけ性暴力は人の心に人生に、大きな影響を及ぼしかねない。更には心だけではなく、身体にだって大きな影響がある。梁さんのお話の中に、梅毒に感染した被害者の話があった。それを理由に離婚されたこと、それだけでなくなんと息子さんにも感染し、息子さんの精神に異常がきたしたこと、一体何度、「慰安婦」にされた過去によってその現在を、未来を傷つけ痛めつけられなければならないのだろう。その悔しさは計り知れない。他にも膺の酷使や無理な墮胎・出産等で子どもを産めなくなった人もいる。性暴力は、心にとっても身体にとっても決して一時その瞬間のものじゃない。そして吉さんにお会いした時、それは改めて突きつけられた。吉さんは、もう「慰安婦」問題のことは考えていないとおっしゃったが、それでもあんな辛い体験忘れられない、どうすればそれを考えずに生きていけるか考えて生きている、そうおっしゃった。私は辛くてたまらなかった。やっぱり、何十年経ったって、その影響は拭い去れないのだ。私は最近、ある記事で、性暴力加害者の更正プログラムに、1日1分でいいから被害者のことを考えるというのがあると読んだのを思い出した。被害者は被害を忘れようとしても忘れられず、一生懸命頭の中心からどかして少しでもよい一日をと生きている。そういう中で加害者は努力しなければ1分だって被害者のことを思い出せないようだ。そのギャップは、あまりに凄まじい。日本ではよく、何十年も前に起きた性暴力のことを今更、というような言説をよく聞くし、「慰安婦」の話をしようとするれば当時の事実関係の話で終わってしまう。それこそがこのギャップの結果だと思う。性暴力のあった瞬間だけを見ていては、その本当の深刻さは分からないし、むしろ当時のことだけで話を終わりにしている時点で、この問題の深さをいかに理解していないかを自らが提示してしまっている。一生懸命傷つけられた過去に向き合い、考え、言葉にし、訴えたが声は本元には届かず否定され続け、結果今は一生懸命それを忘れ楽しく生きようとしているひとがいる、その事の重大さが、日本政府は分かっているのだろうか。

一方でもうひとつ感じたことがある。それは性暴力の持つ力の限界だ。矛盾しているようだが、それも重要な事実だと思う。性暴力は、彼女達から、できることなら幸せに生きたい、そういう人間の根底にある想い・願いを奪えなかったし殺せなかった。よく性暴力は魂の殺人と形容されるが、そうではない。どこまでも殺されたのならば、もう悲しむことも苦しむこともなければなにかを願うことだってない。しかしながら実際は、性暴力はどこまでもひとを傷つけるが、心を殺しきることは出来ないのだ。性暴力の被害者になっても、傷だらけのまま、それでも普通の人と同じようにより幸せな明日を願う。だからこそ大変であり、一方でそこから這い上がる希望、力があるんだと思う。吉さんはいま、金魚を眺めること、ご飯を食べること、歌うこと、毎日に幸せを見つけ、優しさの大事さを心に留めながら、生活している。それは、どんなひどい蛮行も、彼女の全ては壊せない、

暴力の弱さと彼女の強さを如実に現している。あんな日々に私の今・未来の日々までも真っ黒にされてたまるか、そして実際、自分でその黒を自分の日々からはぎ取れる、その強さと現実、私を大いに励ましたし、他の性暴力被害者にとっても希望なんだろうと思う。

また、少女像についてのコメントも、本当に心に刺さってしまった。吉さんは、なぜあれが撤去されそうになるのか分からない、更に、少女像を見てそれが自分の痛みになるのではなく、みんなが平穏な気持ちになる世の中になってほしいとおっしゃった。そしてあそこに行き、自分の痛みになったのは、まさに私だった。勝手な解釈かもしれないが、先述の通り、私はあそこに立った時、性暴力被害者としてそれまで感じていた孤独、男たちから受けた痛み、救われなかった絶望感が吹き出した。とても平穏な気持ちで眺めるなんてできなかった。もし平穏な気持ちで眺められる日が来るとしたら、それはもう性暴力が過去のものになった日でしかない。直接大きな憤慨を見せる訳でもないながら、吉さんの一言一言にこの世から性暴力がなくなることへの願いを感じずにはいられなかった。

でもだからこそ私は、最後の最後、「性暴力のない世界を作っていきたい」とお伝えしたときに、「私たちには実現できなかったけど」と言わせてしまったことが本当に苦しくて悔しくてやりきれなかった。吉さんはお話の中で、自分の話をすれば次世代が同じような体験をしなくて済むのではないかと信じて活動してきたとおっしゃっていた。自分の話をする、それ自体が大変だったと思うし、それを伝えて跳ね返ってくる言葉は決して優しいものばかりではなかった、むしろその言葉を、想いを、踏みにじり、嘲り否定するものも多かったはずだ。それでも次世代、私たち、更にその未来の子どもたちのために、ずっと頑張ってきて下さった。そんな先人たちの存在に、いま性暴力を抱える子たちがどれだけ励まされるか、その大きさは計り知れない。それでも最後には、性暴力の無い世界を実現できなかったと言わせてしまったこと、そしてその発言の大きな一端を担ったのは日本政府と思うと、残念でならない。今日も日本では、権力者がまた性暴力被害者の声を握りつぶそうとしている。少女像を誰もが平穏な気持ちで見られる日は、まだまだ遠そうだ。

それでも私はきっと、吉さんのあたたかい手、やさしい目、性暴力の無い世界をつくらせて下さい、良い世界を生きて下さい、その言葉を胸に、その思い出に励まされながらこれからも生きて、私自身が性暴力の無い社会をつくらうというその闘いの一滴になってゆくような気がしている。

性暴力被害者からみる日本軍「慰安婦」としての記憶とその後はこんなにも共感する点に溢れている。これだけ外交問題、もはや切り札とまで形容されるようになってしまったこの歴史だけれども、やはり一番の根幹には性暴力で傷ついた心が、身体が、人生があることを伝えたくて、こんなにも長く書いてしまった。無論、私の経験と彼女達の経験は比較になるものではないし、比較するようなものでもない。一言で現そうとすれば確かに同じ性暴力被害者であるが、個々人の経験、感じ方、全てがあまりに違うのでそのように括りたいとは思わない。それでもやはり、自らの心身を、性を通し荒らされたことには通底するなにかがあり、それを言語化していくことは、日本軍「慰安婦」制度の中で起きたことが性暴力であったこと、そしてそれが教訓とされることすらないまま過ちが繰り返され続けていることを示す上で重要なのではと思っている。

性暴力は未だに‘平和’とされる今現在においても繰り返されており、更には男性の性の発散場所は日頃から必要なものとの言説は強い。そして今もし戦争が起こったら、果たしてその時性暴力は歴史を教訓に率先して防がれるかと言われれば、答えは否としか思えない。それがいかに大きな問題か。これだけの人が、ただでさえ十分に傷つききった心を

あえてまたかさぶたが出来はじめた頃にそれを引きはがし、曝け出し、その傷を血を見せることでもう二度と他の誰かにこんな傷つけさせまいと闘ってきた。それを一切無視して踏みじり同じ血を後世の子どもたちにも流させていることがいかに残酷なことなのか。私たちはそのことの重大さを今一度、直視しなければいけないと思う。

私は今回参加したことで、様々な想像や想いが確信に変わり、今後どんどん戦争体験者が減り、同時に日本軍「慰安婦」にされた記憶を持つ人々も命を全うしていく中で、私自身が歴史の証人のひとりになったような気がしている。あのあたたかい手に触れ、涙の止まらない私を言葉は通じないながらも優しく励まそうとして下さったハルモニに出会った私が今後、どうその思い・経験をどう活かしていくかであって、私はそこから逃げるような人生は送りたいくない。できることなら、もうこれ以上、ハルモニたちと同じような経験を、そして私と同じような経験についても、誰もしないで済むような社会を作っていく、その力の、大河の一滴になれば、それ以上のことはない。

今回、このツアーに行けたことは間違いなく私のこれからの人生のひとつの礎になり、これから続く未来に向けての種になった。このようなツアーを企画して下さい、参加させて頂いたことに心からの感謝をお伝えして、この長くなりすぎてしまった参加記を終わりにしたいと思う。

ありがとうございました。

◆ 23歳 女性

はじめに、この度大変お世話になりました、代表理事梁澄子さんをはじめとする、一般社団法人「希望のたね基金」のみなさま、支援者の方々に、深くお礼申し上げます。ありがとうございました。「キボタネ若者ツアー2018」に参加できたことは、私にとってかけがえのない経験です。あまりにも多くのことを感じ、学びました。そのすべてを記述することは難しいですし、数週間経った今でも、言葉にすることが容易でないものが多く、どんな言葉を使ってもどこか違うような印象をもつこともあります。私がツアーをとおして感じ学んだこと、そしてそれが私にとって非常に重要なものとなっていることが少しでも伝えられるように、この感想文を書きたいと思います。

ツアーでは、様々なかたちで「慰安婦」問題解決を目指す活動が行われていることを肌で感じ、学ぶことができたと同時に、何度もショックを受けたことを覚えています。初日に訪れた「戦争と女性の人権博物館」では、壁に「この私が生き証人なのに、日本政府はなぜ証拠がないと言うのですか?」と刻まれていました。三日目の夜に訪れた日本大使館前では、交代で平和の碑を守る学生たちに話を聞きました。彼/彼女たちは、自分たちの周りの多くの人びとは自分たちの活動を応援してくれていて、サラリーマンが差し入れをくれたり、友達に励ましの言葉をもらったりする、と言っていました。このような経験は、私に日本の現状がいかに許しがたいものであるかを改めて痛感させました。日本軍によって「慰安婦」にされた女性に、「この私が生き証人なのに、日本政府はなぜ証拠がないと言うのですか?」と言わせてしまっているという事実、私と同じくらいの年齢の学生に、泊まりこみで平和の碑を守らせてしまっているという事実、韓国で目の当たりにした一つ一つの現実が、「慰安婦」問題に対する日本政府の姿勢がいかに深刻なものであるかを生々しく表していると思いました。四日目に吉元玉ハルモニにお会いしたときも同様です。なぜ吉元玉ハルモニが、体調の悪い中、時間をつくって私のような日本の若者に会って、質問

に答え、初めて会った名前も知らない人と一緒に写真を撮られなければならないのか。もちろん、お会いできたことは貴重な体験であり、私にとって非常に重要な経験であること、今後の私の人生に多大な影響を与えることは確かです。しかし、それと同時に、そうさせてしまっていること自体を悔やまずにはいられません。「なんでこうなっちゃったんだろう、こうさせてしまったんだろう」という思いがこみあげました。泣かないと決心していたのに、言葉にできない感情と得体の知れないパワーのようなものから我慢できずに涙を流してしまったことは、今振り返っても悔やまれます。

韓国における「慰安婦」問題解決に向けたさまざまなかたちによる取り組みを学んで、衝撃を受け、改めて日本政府の姿勢がいかにかに深刻であるかを痛感したと同時に、そのあらゆる取り組みが、「慰安婦」問題に対する日本政府の真の謝罪と法的賠償を求めるだけではないことを改めて感じました。梁澄子さんが『「慰安婦問題」と未来への責任-日韓「合意」に抗して』で「運動に参加し運動をリードしたサバイバーたちが、自ら被害回復の途を切り開き、さらに他の性暴力被害者たちをもエンパワメントするに至った」と記述していましたが、まさにその「次世代の平和」を願う姿勢を直にみたのです。それは、ハルモニたちの言葉、「戦争と女性の人権博物館」における「ベトナム戦争で韓国軍によって性暴力被害を受けたベトナム女性の痛み」を紹介する企画展示館の存在、平和ナビにかかわる学生たちの取り組み、マリーモンドで働く方々、このツアーで出会ったすべての人たちから感じたことでした。それは、ハルモニたちの「自分のような被害者を二度と生んではならない」という訴えを引き継いでいることを同時に表していると思います。

韓国で「慰安婦」問題に向き合う多くの方々と出会い、展示をみて、話を聞き、改めて日本政府の姿勢の深刻さを痛感しました。それと同時に、「次世代の平和」への強い願いを改めて「感じ」ました。「感じる」というより、「共有する」「自分の一部になる」という表現の方が良いのかもしれません。もちろん、苦しみや悲しみ、怒りや願いを100%理解し全く同じように考えることはできないと思います。ですが、日本で本を読み、講義を聞いて、感じ学ぶこととは次元の違う、「つながり」のようなものを感じました。「同情」「共感」「絆」ではありません。ツアーで出会った方々から「受け取った」といえばいいのでしょうか。うまく表現できませんが、どんな言葉を使ってもその言葉では薄っぺらく感じてしまうくらい大切なものを「受け取り」ました。今後、許しがたい出来事があるかもしれません。耐え難い事件が起きてしまうかもしれません。それでも、もう私が屈することはないと思います。私の「平和」を願う気持ちは、誰も奪うことはできないと思います。そして、このツアーで出会った仲間は宝物です。仲間とともに、誰一人として、誰かによって未来を奪われることのない世界の「平和」を願い、活動していきます。

最後になりますが、改めて、みなさまに心から感謝いたします。ありがとうございました。そして、またお会いした時は、どうぞよろしく願いいたします。

◆ 25歳 女性

フリージャーナリストとして働き始めるまで、私は日本の植民地支配について深く考えたことがなかった。東京のインターナショナルスクールに通っていた私にとって日本の歴史といえば、戦国武将や忍者といったロマンチックなもの、第二次世界大戦、原爆の悲劇だった。アメリカの大学を卒業し、帰国してから数ヶ月経ったある日、沖縄の米軍基地についてのテレビ特集を観たことをきっかけに沖縄に取材に行くことにした。高江のヘリパッド建設現場を訪れた私は、日本という国で生まれ育ちながらも見たことのない光景は

かりに動揺を隠せなかった。頭上を飛び回るオスプレイ、機動隊員の暴力。自分の知る「日本」が一瞬にして崩れ落ちた。そんな中、一人の女性が座り込みの合間にテントの日陰を借りて、私に沖縄戦の話をしてくれた。「日本人に罪があるわけじゃない。でも責任はある。」と彼女は私に言った。

あの日以来、私は日本人の加害責任について考えるようになった。今回のキボタネツアーに参加しようと思ったのも、日本の植民地支配の歴史と今も続いている「慰安婦」問題についてもっと知りたいと思ったからだ。性暴力の被害者として、なおさら責任を重く感じていることもあった。しかし、申し込んだのは良いけれど、自分の立場からこの問題とどう向き合えばいいかわからなくて、正直とても怖かった。キボタネの「証言」を読むワークショップに事前学習として参加した時、問題の深刻さに少なからず無力感を抱いていた。

キボタネのツアーはそんな気持ちを一転させるものだった。韓国に着いた初日、金東姫館長が自分のハルモニとの出会いについて話してくれた。ハルモニが自分のお祖母さんであるかのように語る彼女の姿に衝撃を受けた。過ぎた歴史として考える日本人とはまるで違って、「慰安婦」問題とは身近にいる人に起きたことだった。平和ナビの学生たちも一人ひとり同じようにハルモニとの出会いを語ってくれた。「慰安婦」問題の被害者たちは日本の報道を通して描かれるような遠い、顔のない存在ではなく、金学順さん、吉元玉さん、金福童さんや李容洙さんという個性豊かな女性たちだった。

中でも一番印象に残っているのが、少女を記憶する森でマリーモンドの代表者の女性が言った言葉だった。「私たちが忘れてはいけないのは、ハルモニも私たちと同じく少女だったこと。被害者たちが本当に望んでいることは少女に戻ることもかもしれない。私たちはハルモニと、一人の少女として出会い直したい。」

様々な立場が存在している中で、やはり「当事者性」は重要だと思う。しかし、「当事者」を大切にする分、どうしても当事者との距離ができてしまう。自分が想像できないほど恐ろしい体験をしている女性たちに自分は「共感する」と言ってもいいのか、と考える。けれど、韓国で出会った活動家たちは当事者性を大切にしながらも、ハルモニたちと心が一つになっていたように思えた。

「慰安婦」記憶の場にある石に座りながら、性暴力の被害者として、自分が求めているのは何か、と考えた。まず、当事者として自分の声を聞いて欲しい。加害者に謝ってほしい。でも、最終的には、自分に起きたことを相手が自分のことのように思っていて欲しい。共感するというのは、共に感じること。

ハルモニが経験したことを自分に置き換えて考えることはできないが、彼女たちの思いを引き継ぐことはできると思う。被害者たちは自分たちとは違う人ではなく、同じく夢を持った女性たち。彼女たちが経験した思いが二度と繰り返されないように、仲間たちと一緒に社会を変えていきたい。

最終日の水曜デモで、太鼓を叩き終えた僧侶がステージに上がり、「日本政府、早く人間になれ、という思いで太鼓を叩きました」と言った。それは、日本人一人ひとりへの問い掛けでもある。「慰安婦」問題をお金の問題だと思っている日本社会の人間性が問われているのだと思う。日本は加害者であることを認め、謝罪し、社会として生まれ変わることで人間性を取り戻さなければならない。今回のキボタネツアーで出会った素敵な女性たちは、自分にとってその道を照らしてくれた。

◆ 19歳 男性 学生

僕は日中のダブルとして生まれ、自身がセクシャルマイノリティーということもあり、小さな時からナショナルアイデンティティーを常に聞かれ、一番よく聞かれた質問の一つが、『中国と日本どちらのほうが好きか』という質問でした。また、小さいころから日中間の歴史や政治についての質問をよくされ、ティーンエイジャーになると自身のセクシャルオリエンテーション、ジェンダーアイデンティティーやセクシャルエクスペリションを理由に様々な質問をされ続け、『自分は他の人と違う』と小さな頃から意識せざるを得ませんでした。そしてその違いを自分自身で否定してしまっていた時期もありました。自分とマジョリティーの違いを肯定的に捉えられるようになった大きなきっかけが16歳の頃、北京LGBTセンターというNGOに出会ったことでした。センターで、僕は初めて人と人の違いは当たり前で、マジョリティーが容認、尊重しないほうがおかしいことに気がつき、人権問題として意識し始めました。そこからフェミニズムや、労働運動に関心を持ち始めました。

大学に入ってから、実名で学校にセクシャルハラスメントを防止するための期間や一学期ごとに授業を行って欲しいというような内容の公開手紙も出し、フェミニズム活動の中でも非常に大きい部分に属するアンチセクシャルバイオレンス活動も積極的にしてきました。活動の中で、『山西省、明かにする会』の活動を知り、歴史の人権問題も解決されるまで活動しようとする姿勢にとっても賛同、尊敬すべきことだと思いました。その中で、今回希望のたね基金で若者ツアーをすると知りました。僕はよく、『日中の架け橋役』を命じられることが多いのですが、日中だけでなく東アジア全体としての視野が無いと、日中関係も正確に捉えられ無いと思っているので中国だけでなく、他の国や地域にも実際に行き、歴史や今の政治情勢を見に行きたいと思っていました。日中関係を理解するに当たって、韓国及び朝鮮半島は切っても切れ無い部分だと思っていたし、費用もかなりリーズナブルだったこともあり、迷わずに応募することにしました。

ソウルへ行く前、グーグルで、キボタネや梁澄子さんを検索すると、『反日団体』、『プロ市民』などといった誹謗中傷的な内容が目立ちました。このような人権を訴える活動に対する汚名は中国でもかなりあるのですが、仕組みはかなり似ていることに気が付きました。中国では、中国共産党による教育の結果、愛国と愛党の違いを意識していても言えない場合もありますが、意識できる人が少ないです。同様に、日本軍が犯した戦時性暴力を捏造という人のほとんどが自身を『愛国者』としてアイデンティファイしていました。これは非常に危険で非合理的な考えだと思いました。自民党の嘘を信じ、愛国と愛党の区別がつかなくなってしまうたら、国益主義(ナショナリズム)、民族主義に繋がりがねないと思っているからです。同時に、愛国と愛党の区別がつかない人にはパトリオティズムとナショナリズムの違いなんてさらにつかないとも思っています。

ツアーに参加している間は、常に勉強することがあり、非常に有意義でした。特に梁澄子さんの講演は非常に内容が豊富で、もっと聞いていたかったので北京に帰ってきてからユーチューブで見えていました。また平和ナビネットワークの学生との交流も非常に有意義でした。韓国では、もうすでにこんなにも学生の中でNGO活動が普及していて、全国ネットワークまでであるというのは、本当に羨ましいことです。戦争と人権の博物館館長のキム・ドンヒさんもおっしゃっていましたが、自分のしている活動や自分の思っていることを親に言えない若者は本当に多いです。少なくとも平和ナビネットワークのみなさんは、自分の考えを打ち明けられるスペースがあるというのは活動の励みになるし、自己肯定にも繋がります。

平和のウリチプに行って、ハルモニにお会いし、手を握ったときに感じた想いをうまく言葉にできませんが、一生忘れない記憶になりました。

水曜デモに参加した際、インタビューを受けました。日本の学生になにを伝えたいかと聞かれ、「僕らに必要なのは暴力と戦争に対する反省であって、決して愛国主義や民族主義教育になってはならない。暴力に国境は無い、だから平和にも国境は無いはず。」と答えました。

中国で活動していると、常に政府の監視や身の安全を意識せざるを得ないので、それで活動を断念したり、政治難民として国外へ避難する方もいます。だからこういった人権問題はNGOだけでなく国の政府も積極的に取り組まないと結局はNGO職員及び周りが全部抱え込み、やっていけなくなります。特に日本は自らを先進国としてアイデンティファイしていますから、海外からのドネーションも貰い難いです。だからこういった人権問題はNGOだけでなく政府としても積極的に取り組むべきことだと感じてきました。もちろん、まずその政府は国民を欺かないような政党が担うべきです。そして自分もいずれかはアジア全体や地球全体の未来を考え、自由や平等を一番に考え、行動できるような政治家になりたいです。

◆ 21歳 女性 学生

私は、この度の『キボタネ若者ツアー2018』に参加できて本当に良かったと思っています。

私はこのツアーに参加する前までは、学校で日本軍「慰安婦」問題について習ったことはなく、テレビやネットなどのニュースで言葉を少し聞くくらいで、日本軍「慰安婦」問題に対して関心はありませんでした。日本軍「慰安婦」問題に関しては1965年の日韓基本条約により日韓で合意の上で、日本が韓国に対して賠償金を支払い、解決したことであるという認識でした。そして、韓国の人々はなぜ今も反日感情を抱き、少女像を日本大使館前に置いているのかわからないと思っていました。

このツアーに参加したことで、初めて知ることがたくさんありました。日本軍「慰安婦」として強制連行された女性は20万人がおり、配給が止める、親を殺すなどの脅迫を受けたり、職を与えるなどの詐欺にあたりして、連れてこられた女性も多くおり、14歳ぐらいの幼い少女たちも性搾取の被害者になっていたことを知りました。

私は、日本軍「慰安婦」は単独的な問題だと思っており、他のことと関連付けて考えることはありませんでした。しかし、他の参加者や希望のたね基金の方々の話を聞くうちに、日本軍「慰安婦」問題は女性の人権や性暴力の問題であり、現在の日本でもJKビジネスやAVなどの問題にも繋っており、解決しなければならない問題であり、当事者意識を持って取り組むべき問題であると思いました。

韓国の方々が少女像を日本大使館前に置いたり、日本軍「慰安婦」問題について日本に謝罪や賠償金を要求したりすることは、反日感情も少なからずあるかもしれないが、戦争を2度と繰り返さない、平和な未来をつくりたいという思いがあるということを初めて知りました。このような韓国の方々の考え、思いを実際に聞いたことで日本軍「慰安婦」に対する感情が大きく動きました。

このツアーに参加したことで、韓国で日本軍「慰安婦」問題について活動している方々は、未来世代のために戦争を2度と起こさないように平和への活動をしており、未来を良くしたいと思っていることに感動しました。2度と繰り返さないためにこの事実を語り継いで

いくことが大切だと感じました。私は広島県出身で、小学校から平和教育を受けてきて、戦争をしたくないし、未来を向いて、平和な世界を築いていきたいと考えていたので、この日本軍「慰安婦」問題に関する活動している方々の考え方に強く賛同し、本当に尊敬しました。

このツアーに参加したことにより、同世代の人々がこんなに日本軍「慰安婦」問題について興味を持ち、自分たちに何ができるについて考える時間は本当に貴重で、刺激になりました。

◆ 22歳 学生 男性

今回のキボタネツアーに参加した際に、案内して頂いた希望のたね基金の方々をはじめ、ガイドの方・ハルモニの方・韓国の若者に感謝の気持ちでいっぱいです。今まで自分の持っていた慰安婦問題に対する知識が、今回のツアーに参加して大きく変わりました。現地の方々の声を聞くことが出来たのは、自分の人生においてとても貴重な経験です。

キボタネツアーに参加して、自分に起こった変化について3点書きたいと思います。

一点目は、慰安婦問題についての自分の中での理解が劇的に変わりました。日本国内では、ウェブサイトで見た情報とテレビで流れてくるニュースの情報の知識しかありませんでした。韓国のデモ活動は、日本に向けて行われているもので、日韓合意の改定をなぜ求めているのだろうか？この疑問がありました。参加してみて感じたこと、それは韓国の方々が訴えているのは日本人への非難ではなく、韓国政府への主張と、未来世代の平和に向けた主張でした。梁さんのお話や各施設・団体の担当者の方々のお話をお聞きして、また韓国人の若者と直接話していく中で、一時情報として慰安婦問題についての情報を知ることが出来た事は、本当に大きな自分の中での変化でした。更に、ハルモニのお宅を訪問させて頂いたきお聞きした事も、非常に大きな衝撃でした。ハルモニの方の心から溢れている優しさ、過去の経験と戦いながらも次世代には憎しみは引き継がない。次世代には幸せになって欲しいという想いが伝わってきました。本人の話聞く以上の情報は無いと思うのですが、自分の人生の中でハルモニとお話できた経験はとても大きなものになると確信しています。

二点目は、参加する同世代の多様な価値観を知り、自分の将来についての考えに変化が起こったことです。自分は、鳥取県で活動していて県内での出会いがほとんどです。県外に時々訪れ同世代と話をする事もあったのですが、今回のように同じ目的を持って4泊5日間語り合える同世代というのはほとんどいませんでした。慰安婦問題という共通テーマで、それぞれの生き立ちや考え方が異なる中、議論できた事は大変貴重な経験でした。また、議論する中で自分も目で見た情報・一時情報を大切にして、偏見やメディアの情報を鵜呑みにしないよう行動していきたいと強く思いました。また、韓国で活動する同世代の方々と知り合えたことも非常に大きな経験だったと思います。一見全然違う思いや信念を持って活動しているように見えて、ドラマが好きだったりアニメが好きだったり、食やデザートが好きだったり、素の部分についても知ることが出来たのは良かったです。その上で、将来どのように解決・協力していくのか話し合えたため、雑談が前提の場ではなくキボタネツアーで交流できた良さだと思います。

三点目は、韓国の国について知ることが出来ました。自分は今まで韓国に行ったことが無く、始めてのことばかりでした。食文化や日常風景・観光地など、今回のキボタネツアーではたくさん知る機会があり、広く国のことについても知ることが出来ました。国のこ

とを知った上で、慰安婦問題を考える事が出来た事は、日本で学んでいては知ることの出来なかったことで、キボタネツアーに参加して良かったと心から思います。

◆ 20歳 学生 女性

「この出来事はHistoryではなくHer storyである」

戦争と女性の人権博物館で聞いた解説の中にこんな言葉があった。私はツアーのはじめに巡り合ったこの言葉を、4泊5日の中で強く実感することになった。

日本軍「慰安婦」問題は、日本では外交問題や政治的な問題として取り上げられがちである。ニュースを見ても過激な反日運動やパク・クネ前大統領と安倍首相のやり取りなどが映るばかりで、ハルモニたちの人生については何も伝わってこない。普通に生活していた少女たちの人生に一体何が起きたのか。肝心の部分が何も報道されない。韓国に来たことで私は初めて、この出来事が歴史の話でも外交の話でも政治の話でもなく、少女たちの人権の話だということに気づくことができた。

ツアー中、私にとって大きな出会いがあった。平和ナビや平和の碑を守っている学生たちである。自分と同じ年くらいの少女たちが、「慰安婦」問題の解決に向けて頑張っている姿は本当に刺激的だった。パク・クネ前大統領の弾劾やろうそく集会など、韓国の若者の活動が活発なことは知っていた。だが毎日毎日銅像を撤去させないように、日本大使館前で座り込みを続ける学生たちをこの目で見て、その勇気や思いの強さに改めて感銘を受けた。加害国側の一人の学生として、今まで「慰安婦」問題について何も知らなかった自分が恥ずかしく思った。平和ナビも、韓国全体に自分たちの活動を広めようと奮闘していた。

「慰安婦」問題についてアクションを起こしている学生団体は残念ながら私たちくらいですと言っていたが、その目は誇りと活力で満ちているように思った。一緒に議論した平和ナビの学生にそのパワーがどこから来るのか聞いてみると、彼女はこう答えてくれた。「私が今やっていることが正しいことであると確信しているからです」と。なかなか言えることではない。私は今とある学生団体でエネルギー問題や貧困問題の解決に向けて活動をしているが、自分の活動が本当に意味のあるものなのか、正しいことであるのかという壁は常に立ちはだかる。平和ナビの学生たちのようにまっすぐ前を見据えてそう言えるようになるには、きっと大きな覚悟と思いが必要だと思う。彼女のようになりたいと、憧れが芽生えた。

もう一つ、私の中で大きいものであったのがマリーモンドの訪問であった。マリーモンドのように、社会問題について真剣に向かい合いビジネスを行うソーシャルベンチャーは、日本より勢いがあるかっこいいなと思った。ガイドしてくださったミンさんの言葉からは、この問題に対してや自分たちのビジネスに対してどれだけ熱い思いを持っているかがひしひしと伝わってきた。若さゆえのパワフルさを彼女からは感じた。やはり「慰安婦」問題は、私たち若い世代が知り、理解し伝えていかななくてはならないものなのだと、マリーモンド訪問で私は実感した。マリーモンドで購入したグッズを身につけるたびに、彼女の顔と言葉を思い出すようにしている。

そして、この4泊5日で私が得た最高の財産は、このツアーで出会った日本人メンバーであると思う。彼彼女らからたくさんのことを学び吸収できた日々だった。ジェンダーについて学び問題意識を強く持っている人、フェミニズムについて伝えていこうと頑張っている人、日本を飛び出して海外で生活している人など様々。私が長年志してきたマスコミの記者の方もいて、日本と韓国双方に関わり運動しているスタッフの皆さんもいた。一人も

同じフィールドの人がいないというとても新鮮なコミュニケーションが心地よかった。

聡子先生が最後におっしゃった言葉が心に残っている。「この全然違うフィールドにいる仲間を大切にしてください。将来大事なものになる仲間はこういう繋がりだから。」数年後、数十年後に集まったときにもきっと、このメンバーなら素敵な話が聞けるだろう。その時に私も自分の信じるものに向かって頑張っている自分でありたい。そう強く思った。

実際に自分の目で見ること。実際に自分の耳で聞くこと。その大切さが平和ナビの学生やミンさん、そしてハルモニとの出会いによって改めてわかった。それとともに無知であることの恐ろしさも強く感じた。この「慰安婦」問題については、ただ日本でマスコミからの情報を得るだけでは何も理解することができない。実際に韓国に行って、水曜デモや座り込みやハルモニの証言をリアルに肌で感じてみるのが何より大切なのだ。実際に自分で感じたことを頼りに意見を持ち主張する。「慰安婦」問題に限らず、社会問題全般に関してそうして意見の持ち方をしたいと考えるようになった。

将来私は、社会の様々な出来事を伝えていく仕事がしたいと考えている。明るい出来事も暗い出来事も、多くの人々が共感し前向きになれるように届けられたらと思う。その一步として、今回のツアーで見たこと聞いたことを自分の周りに少しずつ伝えていきたい。そうして私の話を聞いた人がまた次の人へ伝えていけば、私が作った小さな人の輪はどんどん広がっていこう。大学生活は残りあと2年、私は動き出そうと思う。やがてそれが大きな平和の輪になっていくと信じて。

◆ 女性 24歳

「慰安婦」問題について、韓国側の意見や認識、そして問題へと向き合う意識を深く知る事の出来たツアーになりました。そして、日本と韓国には「慰安婦」問題に対する大きな認識の隔りがあり、この壁を乗り越えるためには、日韓の一人ひとりの国民が、政治的思想や互いの国への先入観を捨て、本当の事実を学ぶ必要があると感じました。先ず、ツアー初日に見学した戦争と女性の人権博物館の地下展示にて知った、ベトナム戦争時に起きた韓国兵による蛮行には言葉を絶するものがありました。それと同時に、韓国内で「慰安婦」問題の解決の為に活動している方々は、韓国政府が非を認めるように訴え、韓国兵からの性暴力を受けたベトナム人女性たちと正面から向き合い、支援をしている事を知りました。戦時下における性暴力の問題は、被害国であり加害国であることも多く、もちろん日本も例外ではありません。だからこそ、日本人は「慰安婦」であった女性たちの人生と、歴史的背景、そして日韓合意に至った政治的背景を知るべきだと感じました。挺対協が設立したナビ基金はベトナムだけでなく、コンゴ民主共和国の性暴力被害者女性への支援、そして2014年には韓国内基地村における「米軍慰安婦」への訴訟支援を行い、提訴をしていることを知りました。日本国内ではサンフランシスコ市に平和の少女像が設立されたことに対して強い反発がありますが、ここにはアメリカを含め、三者間での大きな認識の違いが見えます。2015年の日韓合意にて、日本政府及び安倍晋三首相は韓国に心からの反省と謝罪を表明し、10億円を拠出しました。これにより不可逆的に解決に至ったはずの日韓合意の破棄を望む韓国側の主張は、二日目の梁澄子さんの講演で学ぶ事が出来ました。前政権による政治的思惑による解決は歴史の売り買いであり、現政権による日韓合意破棄の申し出は国と国の約束を破ってまでも、前政権の過ちを正すべきだという韓国国民の強い思いを酌んだものです。朴槿恵前大統領の罷免を求めるキャンドルデモを含め、韓国は真の民主主義国家であると理解しました。三日目の夜、日本大使館前で平和の少女像を守

る学生たちを訪ねました。韓国は日本より気温が低く、三月とはいえまだまだ寒いです。簡易的なテントを張り、24時間の交代制で平和の碑を守る様子には、学生たちの解決への強い意志を感じました。韓国の学生の話で、韓国では保守やリベラルの垣根を超えて、辿り着く目標が同じなら団結することができるということを聞きましたが、これは見習わなければならない事実で、現在の日本では消えてしまった本来のあるべき形です。四日目の参加者感想会では、率直に感じたこと、そして意見を述べ合いました。同じ学習内容を経ても感じ取れることは各々それぞれであり、これが多人数でのスタディツアーの良い点だと思います。そして、四日間の学習を経て参加した最終日の水曜デモを含め、五日間で沢山のことを吸収し、見解を広めることが出来ました。学ぶ機会を与えてくださった皆さまに、感謝致します。「慰安婦」問題の本当の解決に向けて、日本人として出来ることをしていきたいです。

◆ 29歳 男性

今回、私はキボタネの運営委員でありながらツアーに参加した。「慰安婦」問題の活動に携わってまだ日は浅いが、まだまだ知りたいことばかりである。今回のツアーは蓋を開けてみたら結果的にはソウルに着いた初日からとても濃い一日一日の連続だった。「戦争と女性の人権博物館」では、当時の女性に加えられた性暴力の生々しさと戦争が残した重々しい爪痕の深さが伝わってきた。そして、今まで声をあげられなかった元日本軍「慰安婦」のハルモニたちが少しずつ声をあげ、それに呼応するように立ち上がった人々の闘争の歴史も知ることができた。そしてそれだけではなく、現在の世界各地の紛争地で起きている性暴力で傷ついた女性たちを支援する活動にもハルモニたちが率先して取り組んでいるということも知った。

二日目は日本軍「慰安婦」問題に関して活動している平和ナビに所属する韓国の若者たちと意見交換をした。平和ナビの人たちの、「差別のない社会を目指している」という意見を聞いて、運動に対する強い意志を感じた。韓国でも日本の状況と似ていて社会問題に関して意見を述べるのが難しいというのが意外だった。

三日目はハルモニたちをモチーフにした商品を販売している「マリーモンド」というソーシャルベンチャー企業を訪問した。そういう企業が存在すること自体が驚きだった。商品自体もブランドとして確立されていてKPOPのアイドルが使って人気が出たという話を聞いて韓国での日本軍「慰安婦」問題への取り組みが本当に幅広いものだと知った。午後はオリンピック公園「少女たちを記憶する森」と南山「日本軍『慰安婦』記憶の場」の見学に行った。「少女たちを記憶する森」では、ハルモニたちが戦場で性奴隷にされ、失ってしまった青春を少しでも取り戻そうという思いを感じた。「日本軍『慰安婦』記憶の場」では、日本軍が少女たちに加えた暴力を忘れないという意味でいくつかのモニュメントが建てられていた。

四日目は、ハルモニたちが生活を送っている「平和のウリチプ」を訪問した。ここでは吉元玉ハルモニが顔を見せてくれた。ハルモニの言った、「慰安婦の時のことは忘れられないけど、どういう風にすれば忘れられるか考えながら一日一日を過ごしている」という言葉が印象的だった。その後、戦争と女性の人権博物館で参加者感想会を行った。みんなそれぞれ今回のツアーでとても強い刺激を受けたようだった。

最終日の五日目は、景福宮を見学した後、水曜デモに参加した。今回が1326回目だが、参加者が多くて驚いた。日本側からの参加団体もキボタネだけでなく、いくつかあった。

デモでは途中で参加者が踊りを披露したり、吉元玉ハルモニが歌を歌ったりする場面があった。韓国の社会運動のやり方を学ぶ上で新鮮だった。デモが終わるとみんなそれまで一緒になっていたキリスト教団体も仏教団体も学生団体もそれぞれ散り散りになって日常の姿に戻る様子が興味深かった。

私は今まで在日韓国人としてあまり自分の国の歴史問題に向き合ってこなかったが、今回参加してみて本当によかったと思う。なぜなら、韓国の日本による植民地化で起きた一連の歴史問題への取り組みは単純な一枚岩ではないことがわかったからだ。韓国で日本軍「慰安婦」問題に取り組んでいる人たちは、日本側に謝罪と賠償を求めているが、それは決して日本人に対する恨みを述べているわけではなく、実際に被害を受けて生きている人間がいるからこそ、真摯な対応を求めているだけなのだ。日本では主にメディアによる影響で日本軍「慰安婦」問題に取り組む運動などが敵視される傾向があるが、今回ツアーに参加してみて、そのような印象からは程遠いことがわかった。日本での運動も盛り上がり、まさしく希望の種が広がることを願う。

◆ 20歳 学生 女性

「慰安婦問題は人権問題。」

これが今回ツアーに参加して私の慰安婦問題に対する見方を変えた重要なキーワードだ。

学校では福祉を専攻しており、福祉政策には時代背景が大きく関わっているということを学んできたにもかかわらずなぜ慰安婦問題について知らないのだろう。ひめゆり学徒隊を弔う場所を中学校の修学旅行で訪問したのになぜ同じくらいの年齢の少女が知らない国から沖縄に連れてこられ性暴力を受けたことは教えられていないのだろう。国と国の話ではなく慰安婦問題は人権問題であると私の周りにいる何人の人が知っているのだろう。日本で慰安婦問題（戦争加害国の一面）について正しく知るということは自分自身が主体性をもって学ばない限り難しいことなのではないか。多くの学びと気づきの中に何か悶々としたものを抱いて帰国することとなった。そう思いながらも「慰安婦問題は人権問題」、慰安婦とされた少女たちは、いま虐待に苦しむ少年少女と何ら変わらないと気づかせ、確信させてくれたのは、同じツアー参加者であるAさんの発表だった。なぜなら発表の最後のほうにあったレジュメに、社会の発展段階という図があったのだが、その発展段階は子供への虐待に対する社会の反応と似ているなど感じたからである。「虐待をされる子供」→「虐待が発見されれば場合によっては刑事罰、社会的制裁、隔離措置」→「子どもに対する虐待を防止するための法律・機関設置・被虐待児のための保護施設の設置・虐待者に対するカウンセリング」→「つらい思いをする子供たちがいなくなる」私はこのように当てはめることができた。パワーの大きい者から小さい者へという構造は慰安婦問題においても同じである。そう考えることが出来た私は急に国と国の問題として、そして反日の象徴として慰安婦問題を考えることがいかに人権意識が低いのか、また人権という視点に欠けた報道や情報にさらされて暮らしていたのかに気づいた。

今回、慰安婦問題について現地で学ぶ機会を設けてくださったキボタネの皆様にはとても感謝しています。そして同年代の学生や社会人として働く人たちとこの時間を共有できたことが何より貴重だったと思います。

ありがとうございました。